【前説】（ナレーター）
ようこそ、国立特別支援教育総合研究所の研究所公開へ。
この動画は、主に教育関係者の方に向けて制作されていますが、教育関係者以外の方にもわかりやすい内容でご紹介しております。
また、研究所職員から現場の教育関係者への応援の気持ちを込めてお送りします。
特総研では、研究所公開動画コンテンツ以外に、各特別支援学校における遠隔授業や動画配信の取組などをホームページ上で紹介しております。
そちらも是非、ご覧ください。

【動画本編】
タイトルは、新しい生活様式における聴覚障害のある子どもへの関わり。
山本：みなさん、こんにちは。国立特別支援教育総合研究所の山本と言います。
本動画をご視聴いただき、ありがとうございます。
本日は、「新しい生活様式」の中、子どもをどのように支援していけば良いのかについて、ご紹介します。
それでは、まず、聴覚障害教育研究班のメンバーを御紹介します。横倉上席総括研究員です。
横倉：横倉です。よろしくお願いします。
山本：続いて、宇野総括研究員です。
宇野：宇野です。よろしくお願いします。

第１節聾学校で行われている配慮
山本：それでは、早速、始めていきたいと思います。
横倉先生、今回の新型コロナウイルス感染症の拡大は、聴覚障害のある子どもに対しても、大変大きな影響を与えましたね。
横倉：そうですね。聴覚障害のある子どもが在籍している特別支援学校、ここでは「聾学校」と言わせていただきますが、緊急事態宣言解除後の聾学校に対して、大変大きな影響があったと、現場の先生方から聞いています。
山本：小・中学校等においても、三密を避けた学習環境を整えるといった工夫を行っていると聞きましたが、聾学校には、それ以外の配慮が必要ということだったということなのでしょうか。
横倉：そうですね。「三密を避ける」というのは、聾学校においても、同様なのですが、やはり、聴覚障害があることによる困難さにどのように対応していくかということが、聾学校の先生方が、苦労されたようです。
山本：聾学校では、例えば、どのような配慮を行っているのでしょうか。
横倉：例えば、通常のマスクではなく、フェイスシールドやマウスシールド、透明マスク

などを使って、授業がされています。
今は、フェイスシールドやマウスシールドなどが一般的になりましたが、緊急事態宣言解除後の学校再開に関わる報道の中でも、聾学校ではいち早く、独自に透明マスクやアクリル板を活用して、口元を見えるように配慮した授業を行っているということが伝えられましたね。
山本：そうでしたね。聾学校では、早い時期から透明マスクなどが使用されていましたね。宇野先生、これは、どうしてなのでしょうか。
やはり、聴覚障害者にとって、口元が見えるということは重要なのでしょうか。

第２節どういった課題があるか
宇野：はい、聴覚障害者にとっては、このように口元が見えるということは大変重要なことなのです。
通常のマスクを用いることによって、口元が見えず、相手の話が分からないという状況が生じやすくなってしまいます。
まして、マスクで音が籠もってしまうため、補聴器を通した声は、普段以上に聞きづらくなってしまいます。
山本：「新しい生活様式」では、飛沫を飛ばさないという意味においても、大きな声で話さないということが大切になりますが、聴覚障害の方にとっては、声量以外にも、マスクを着用すると、更に相手の話を理解することが難しくなってしまうということでしょうか。
宇野：そうですね。この図を御覧ください。
この図は、私たちの耳の中を表したものです。空気中の音や音声は、外耳道（がいじどう）と呼ばれる「耳の穴」に入り鼓膜を振動させます。
鼓膜の振動は耳小骨（じしょうこつ）と言われる三つの骨を通じて増幅されながら、蝸牛（かぎゅう）と呼ばれるこの「かたつむり管」に届けられます。
蝸牛には、１５,０００個以上もある、毛の生えた細胞「有毛細胞」があり、この毛が震えると、細胞が刺激されて、電気信号が発生し、神経を伝わって脳で音や音声として認識されます。
外耳道や鼓膜、耳小骨に障害がある場合は、「伝音難聴」と言い、かたつむり管以降に障害がある場合は、「感音難聴」と言います。
伝音難聴の場合は、音が伝わりづらいだけなので、マイクや補聴器などを使って音を大きくしてあげると、ある程度は聞こえを保証することができますが、感音難聴の場合は、１５,０００以上もある有毛細胞の種類や場所、障害のある数などによって、音は歪んで聞こえてしまいます。
障害の程度や聞こえ方は一人一人違うと言われています。
この図のように「ア」と聞こえた場合でも、伝音難聴だと、小さく「ア」と聞こえますが、感音難聴の場合は、歪んだ「ア」に聞こえ、障害の程度によっては、音としては聞こえる

が、何と言っているのか分からない、といった状況になります。
山本：このような困難さのある聴覚障害者にとって、マスクで口元が隠れるということは、どのようなことになるのでしょうか。
宇野：聴覚障害のない方は普段意識をしないと思いますが、実は、私たち自身も話し手の口元を見て多くの情報を得て話を理解したり、相手の意図を判断したりしています。
マスクによって口元が隠れると、まず、相手の表情が読み取れなくなります。
話の抑揚など感情に関わる音声情報とともに、表情による視覚情報が不足するため、相手の意図を理解することが非常に困難になります。
又、聴覚障害者にとっては、手話を使いながらも口元の動きと合わせて意図を伝えたり、日本語の情報を補ったりしていますので、聴覚障害のある方にとって、マスクで口元が隠れるということは、相手とコミュニケーションする上で大きな支障を来すことになるのです。
山本：なるほど、「手話を使うからマスクをしても大丈夫」とはならないのですね。
確かに、テレビ報道などでも、最近、手話通訳者の方がフェイスシールドやアクリル板などを用いて手話通訳をしている光景を見ますが、マスクをしていることはありませんね。
横倉先生、こうした困難さのある子どもが在籍している聾学校では、どのような配慮を行いながら学習をしているのでしょうか。

第３節教室環境

横倉：しばらく、各聾学校では、模索しながらフェイスシールドやマウスシールド、透明マスク等が日常的に使われるようになってきたようですね。
当然、教員は、ソーシャルディスタンスを保ちながら子どもと接することになりますので、これまで以上に、教員の声が子どもに届いているのかについて注意することが必要です。
具体的には、補聴器や人工内耳の電池残量の確認や教員の声などを直接補聴器に届けるFM（エフエム）補聴システムの活用などについて、これまで以上に注意を払いながら、音や音声情報の保証に心掛ける必要があります。
又、教室環境では、少しでも聞こえやすくするため騒音が少なくなるように、ゴルフボールで椅子や机の脚を保護したりすることも有効です。
さらには、視覚的な情報をいつも以上に多くし、見て分かる、読んで分かるという状況をつくることが大切だと思います。
ただし、情報がありすぎることで、逆に学びにくくなる子どももいるため、実態に応じた対応が必要です。
山本：聾学校などのように、環境を直ぐに整えることが難しいといった、特別支援学級や通常の学級の場合には、どのような工夫ができるでしょうか。
横倉：通常の学級の場合ですと、座席の位置をこれまでよりも前の席にして、先生の話を聞きやすくすることも考えられますし、教室の騒音を少なくする配慮は、他の子どもたち

にとっても有効な学習環境ですので、学校として検討することもできるかと思います。
又、少なくとも、聴覚障害のある子どもに関わる先生は、通常のマスクではなく、フェイスシールドを使用してもらいたいですね。
光の射し方によって、反射が多い場合は、シールドではなく、口元シールドにするなど、使い分けても良いかと思います。
特別支援学級であればアクリル板を用いた「つい立て」などを使えるよう、管理職の先生とも相談をして対応してもらいたいと思います。
山本：こうした特別な環境を整えるということのほかに、「新しい生活様式」の中で注意した方が良いことはありませんか。

第４節補聴機器
宇野：補聴器はもとより、エフエム補聴システムで使われるマイクなどについても、できるだけ使う人以外には触れさせないようしたいものです。
この「スライドの機器の表面なども、ウイルスが長時間生存しやすい環境です。
どこをよく拭いて、どこにはアルコールは付けない方が良いかなど、機器によって異なるため、販売業者等に問合せておくことが必要です。
山本：補聴器などの取り扱いについては、御家庭でも同じですよね。
毎日使うものですので、日々のメンテナンスと合わせて、感染防止にも努めたいですね。
宇野：石川県立聾学校ホームページには、機器の手入れの一例が紹介されていますので、御覧ください。
是非、保護者の方も、販売業者に御確認ください。

第５節寄宿舎
山本：横倉先生、全国には寄宿舎が設置されている聾学校も多くありますね。
新しい生活様式における聴覚障害のある子どもの家庭生活を考える上で、聾学校の寄宿舎の取組で参考になるものはありませんか。
横倉：スライドにも示しましたが、寄宿舎は、多くの子どもが寝食を共にする場でもありますので、「物を貸し借りしない。」「マスクはビニール袋に密封して捨てる」「自室へ入る前の手洗いの徹底」など、共同生活を送る上でのルールの徹底などが必要です。
こうした新しい生活様式を踏まえたルールについては、家庭生活を送る上でのルールも同じです。
目に見えない「ウイルス」というものへの対応ですので、単に「ルールだから」「約束だから」というのではなく、何故、このルールが必要なのか、守らないとどのような危険があるのか、などについて、具体的なイメージとともに、子どもに伝え、理解を促すということが大切になります。
山本：視覚的な手掛かりが重要な子どもたちだからこそ、視覚的に見えない事象を考える

経験や学びが大切になるということでしょうか。
横倉：そうですね。新しい生活様式での取組は、学校、寄宿舎、家庭、それぞれが単独で行うのではなく、全ての生活の場で取り組む必要があります。
宇野：寄宿舎はもとより、学校と家庭が連携することが、これまで以上に大切になるということですね。
横倉：このことは、感染症予防の観点だけではなく、聴覚障害のある子どもの学習を考えても同様です。
今回、学校に登校できない期間がありましたが、このことを実感した学校関係者や保護者の方も多かったのではないでしょうか。
緊急事態宣言下において、学習に関わる動画を配信した学校もあると聞いています。
一方で、家庭で学習する習慣が身に付いていないため、休校期間はなかなか学習できなかったという事例もあったと聞いています。
また、繰り返しのドリル学習では、子どもがすぐに飽きてしまったという話も聞きました。
山本：今後、再び、長期に渡って登校できないという事態があるかは分かりませんが、「新しい生活様式」においては、学校教育と家庭教育が連動し、互いの役割を発揮していくことが、これまで以上に求められるということでしょうか。
横倉：その通りです。
宇野：私もそう思います。

第６節終わりに
山本：そろそろ時間となったようです。
この動画は、この辺りで終わらせていただきたいと思います。
私たち聴覚障害教育研究班では、聞こえにくい子どもたちの教育に関する研究や調査を行っています。
その結果などについては、研究報告書やガイドブック、小冊子などにして、研究所ホームページからダウンロードできるようにしています。
本日の動画を視聴して、御興味をもたれた方は、スライドに示した研究所のホームページにアクセスしていただければと思います。
本日は、ありがとうございました。
横倉：ありがとうございました。
宇野：ありがとうございました。

【後説】（ナレーター）
動画を最後まで御視聴いただきまして、ありがとうございました。
最後に、アンケートのお願いです。
アンケートはわたくしどものホームページの研究所公開のページにアンケートというボタ

ンがございますので、クリックしていただけますと、回答をしていただけます。
今後の事業運営のため、是非、ご協力をお願いいたします。